

## デイ・サービスのプログラム評価と個別援助実践評価

副 田 あけみ\*  
齋 藤 誠\*\*

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1 評価研究の意味           | 3) 高齢者調査の結果        |
| 1) 評価研究の対象          | 4) 家族調査の結果         |
| 2) 評価の基準            | 3 デイ・サービスの個別援助実践評価 |
| 3) デイ・サービスの評価研究     | 1) 個別援助実践評価の方法     |
| 2 デイ・サービスのプログラム評価   | 2) 「個別データ」の事例      |
| 1) 研究意図とIケア・センターの特徴 | 3) 個別援助実践評価の結果     |
| 2) デイ・ホームのプログラム評価方法 | 4 まとめ              |

### 要 約

社会福祉における評価研究をその評価対象と評価基準によって10のタイプに分けた。この10のうち、効果基準によるプログラム評価と、効果基準による個別援助実践評価とを、執筆者のひとりが勤務する泉苑ケア・センターのデイ・サービスにたいしておこなった。プログラム評価研究の結果は、高齢者のほとんどが本プログラムに満足感を示していること、とくに非痴呆性老人の満足度が高いこと、家族介護者は本プログラムにいくつもの意義を見いだしているが、なかでも精神的な支えとしての意義を強く感じていること、とくにこれは痴呆性老人をかかえる家族に強いことを示した。また、1年間の利用で高齢者の心理的側面と生活態度に好ましい変化が4分の1から3分の1の高齢者に見られることが家族調査の結果によって明らかにされた。とくにこれは非痴呆性老人に多く表れた。介護者の1年間の変化としては、時間的余裕と精神的余裕が得られたという変化が3分の1から2分の1の人に見られることがわかった。これは痴呆性老人をかかえる介護者に多かった。個別援助実践評価研究は、ケースごとにその個別的な対応課題が3つの時期ごとに達成されているか否かを判定した。非痴呆性老人のばあいは1, 2, 3期とも7割から8割の人が課題達成していたが、痴呆性老人のばあいは1期の7割から4割, 3割と課題達成ケースが減少していた。

\* 東京都立大学人文学部

\*\* 泉苑ケア・センター

## 1 評価研究の意味

### 1) 評価研究の対象

社会福祉における評価研究は、評価の対象によって大きく2つに分けられる。ひとつは、A福祉政策やサービス事業（制度としてのサービス事業）を評価する研究であり（制度・政策評価）、もうひとつは、Bサービス分配決定やサービス提供という福祉実践のパフォーマンス（行為としてのサービス内容）を評価する研究（実践評価）である。

Aは主として政策プランナーや行政マンが、政策の企画・立案や既存制度の拡充・改革のために役立つ情報を得るために必要とする。Bは主としてサービス分配決定や直接のサービス提供をおこなう機関・組織の管理者、また第一線で働く実践家（ソーシャルワーカーやケアワーカー）が、サービス分配や提供方法の検討・改善に役立つ情報を得るために必要とする。Bのばあい、評価の対象は特定の機関・組織がその理念・ポリシーに従って提供している特定のサービス・プログラムを全体として評価するばあい（a）と、個々のサービス受給者にたいする個別の援助実践内容を評価するばあい（b）とがある。（a）はプログラム評価、（b）は個別援助実践評価ということができる。<sup>1)</sup>

評価研究をおこなう主体は、政策プランナーや行政マン、あるいはサービス分配決定および提供の機関・組織の管理者やソーシャルワーカー、ケアワーカーなどの実践家が考えられる。また、これら機関や組織から独立している研究者は、これらの主体がおこなう評価研究の協力者になったり、これらから委託を受けたりして評価研究をおこなう。その意味では、研究者の評価研究の目的は、研究結果を活用しようとするこれらの機関や人々に信頼できる情報を提供することである。だが、研究者はサービスの受給者（利用者）や、将来サービスを利用する可能性をもつ市民（消費者）の立場に立って、制度としてのサービスや個々のサービス・プログラムおよび個別援助実践の評価研究をおこなうことも期待されている。なぜなら、こう

した人々は種々の資源不足から評価主体にはなりにくいからである。

### 2) 評価の基準

評価という行為は何らかの価値基準にもとづいておこなわれる。これまでに用いられてきた価値基準としては、ア) 妥協性（適切性）、イ) 効果、ウ) 効率性、エ) 衡平性がある。

ア) は、制度としてのサービス水準あるいは行為としてのサービス実践が社会的観点からみて妥当（適切）であるかどうか、どのていど妥当（適切）であるかを測る価値基準である。このばあいの社会的観点としては、生存権、生活権、ノーマリゼーション、QOLといった思想が考えられる。

イ) 効果は、制度としてのサービス事業や行為としてのサービス実践の目的がどのていど達成されたかを測る価値基準である。制度としてのサービス評価のばあいも行為としてのサービスの実践評価のばあいも、当初予期していなかった効果（副次効果）が生じることがあるが、それは設定していた目的からみてプラスのこともあれば、マイナスのこともある。正味の効果は設定した目的の達成度からこの副次効果を加えたり差し引いたりしたものといえる。

ウ) 効率性は、制度の実施あるいはサービスの実践にさいして投入した資源（金銭、時間、労力など）と効果との関係を測る価値基準である。政策プランナーたちがかもっとも関心を寄せるのは、この効率性研究のうちの費用便益（コスト・ベネフィット）分析であろう。

エ) 衡平性は、特定のサービスを必要とする人々にサービスが届いているかどうかと、必要とする人々にはサービスが平等に分配されているかどうかとを測る価値基準である。<sup>2)</sup> これらは、主として制度としてのサービス評価にたいして用いられるが、とくに後者は行為としてのサービス実践評価にも用いることができる。

### 3) デイ・サービスの評価研究

上記に示した評価の対象と評価の基準とをクロスさせると、表1のような評価研究タイプを想定する

ことができる。

表1 サービス評価研究のタイプ

基準	制度としての サービス事業 評価	行為としてのサービス 実践評価	
		プログラム 評価	個別援助 実践評価
妥当性	①	⑤	⑨
効果	②	⑥	⑩
効率性	③	⑦	/
公平性	④	⑧	/

今、デイ・サービスの評価研究をそれぞれのタイプにあてはめてみると、たとえば以下になるであろう。

①タイプ デイ・サービス事業の実施要綱に示されている実施事業内容、利用定員、職員配置、運営方法、デイ・サービスセンターの構造および設備などが、利用者とその家族のQOLの向上という事業目的を達成するのに妥当な基準であるかどうかを評価する。

②タイプ デイ・サービス事業の目的は、「在宅の虚弱老人および寝たきり老人等にたいし、通所または訪問することによって、これらの者の生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持向上等を図るとともに、その家族の身体的・精神的な負担の軽減を図ること」である。この事業の実施によってこの目的がどの程度達成されているかどうかを評価する（この事業を利用している複数のセンターの利用者、つまり虚弱老人・障害老人および家族のQOLと、利用していない同じ状態にある老人や家族のそれとの比較などの方法によって）。

③タイプ 本事業の政策意図のひとつは、本事業や他の在宅サービスの利用によって、老人ホームの入所や老人病院への社会的入院をできるだけ予防したり延期することである。本事業や他の在宅サービスの組合せかたや資源の投入量によって、老人ホームの入所や老人病院への社会的入院の比率

が地域ごとにどの程度異なるかを比較するという方法でその効率性を評価する。ただし、本事業だけの効率性を抽出することはむずかしい。

④タイプ 本事業が対象としている虚弱老人や寝たきり老人およびその家族に、本事業の存在や利用可能性がきちんと知らされているかどうか、また、利用したいと思ったときにその利用意思を阻害するような手続き上の困難さが存在しているのかなどアクセス面を評価する。あるいはまた、本事業が対象としている人々のうち、どの程度の割合の人々が本事業を利用することができているかどうかを評価する。<sup>3)</sup>

ここまでが制度としてのデイ・サービス事業評価研究の具体例である。次はサービス実践評価のうちのプログラム評価の具体例について。

⑤タイプ 特定のデイ・サービス実践施設がその施設のサービス提供理念・目的のもとづいて実施しているデイ・サービスのありかたの妥当性について、たとえば、利用者の組合せかた、痴呆性老人の参加方法、職員配置、実施している日常動作訓練や養護、健康チェック、入浴サービスなどの事業内容の質（水準）などを、利用老人や家族のQOLの向上といった観点から評価する。

⑥タイプ 特定のデイ・サービス実施施設のサービス提供目的がどの程度達成されたかを、高齢者や家族にたいする観察や面接、質問紙などで調査する。

⑦タイプ 特定のデイ・サービス実施施設のサービス提供のために投資した資源（職員数、サービス提供時間、金銭、ボランティア活用など）と、サービス提供の効果との関係をあきらかにする。

⑧タイプ 特定の施設が対象とするエリアに居住する老人と家族のうち、本サービスを必要とする人々のなかで、どの程度の割合を利用者として得ているのかを評価する。

最後に個別援助実践評価の例であるが、これは2つのタイプが考えられる。

⑨タイプ デイ・サービスを実施する特定の施設の職員が、個々の利用者にたいして設定した個別援助実践目的（サービス提供をするなかで目指す個別的対応目標ともいえる）と、その目的達成の

ための対応方法が妥当（適切）であるかどうかを評価する。

⑩タイプ スタッフがサービス提供のなかで個々の利用者にたいして設定した個別援助実践の目的がどのくらい達成されたかを調査する。

以上はいずれも例であって、デイ・サービスの評価研究はこれがすべてというわけではない。以下では、ここで例示したうちの⑥と⑩のタイプの評価研究の結果を報告する。

## 2 デイ・サービスのプログラム評価

### 1) 研究意図とIケア・センターの特徴

⑥と⑩のタイプの評価研究は、都下F市にある泉苑ケア・センター（以下Iセンターと略記）におけるデイ・ホーム事業にかんしておこなった。デイ・ホームという事業は、都の高齢者在宅サービス事業実施要綱（1987）のなかの基本事業にあたるもので、日常動作訓練、趣味生きがい活動、輸送サービス、生活指導・相談、健康チェック、家族介護者教室と食事サービスを含む。国の在宅老人デイ・サービス事業の要綱にある基本事業にあたる。Iセンターはこの事業の他、通所事業としての入浴サービスと機能訓練事業、ショートステイ事業を実施している。特別養護老人ホームに併設された施設である。

このデイ・ホームの実践を評価する意図は、職員が自分たちのおこなっているサービス提供の意義を確認するとともに、よりよいサービスの実践方法や技術を検討していくための材料を獲得することにある。来年度から在宅介護支援センター事業を始めるにあたって、センターのおこなっているサービス・プログラムの意義をおさえたうえで、個別援助実践のありかたを研究しておくことが必要であるとの認識がスタッフのなかにあった。また、サービス提供実践の効果を公けにすることにより、F市が進めていこうとしているデイ・サービス事業の拡充とその充実化にはずみをつけたいという研究意図もある。

Iセンターの職員配置は所長1、生活指導員4、

OT1、寮母7、看護婦2、（ホームと兼任）、介助員2、運転手2、添乗員1、栄養士1、調理員3、事務員1で、このうちデイ・ホーム事業を常時担当しているのは、生活指導員2、OT1、寮母3、寮父1の計7名である。現在、特別養護老人ホームとケア・センターを増改築中で、工事終了の来年度からは、現在のデイ・ホームとは別に痴呆性老人のデイ・ホーム事業と在宅介護支援センター事業を実施する予定である。また、ショートステイの定員も倍増し、入浴サービスの利用回数も個々の利用者あたり月3回になることもあって、来年度のセンターの職員数は非常勤を含めて53名になる予定である。

従来、デイ・サービス事業と機能回復訓練事業（センターではこれをデイ・ケアと呼んでいる）の利用者は、午前中合同で、午後は別れてそれぞれの活動をおこなっていた。しかし、工事の関係で一昨年より、一日中合同でデイ・ホームの活動をおこなうことになった。センターを利用するさいの市への申込みは、デイ・ホーム事業とデイ・ケア事業は別々であるが、サービス対象者としては現在とくに大きな区別なく採用決定をおこなっている。現在はデイ・ホームとデイ・ケアをあわせて75名の高齢者が、毎日25名ずつ（一人あたり週2回）利用している。

毎日のデイ・ホームでの活動内容は以下のようになっている。9時に3台の車がF市内の3つのエリアを回り、利用者を迎えに行く。10時過ぎにセンターに到着すると、皆がそろったのを確認して全体で挨拶等をする。午前中は全員椅子に座って輪をつくり、職員がリーダー（リーダー役は毎日交替でおこなう）となって声をかけながら体操をおこなう。ただ体操をおこなうだけではない。なごやかな雰囲気づくりのために冗談をいったり、最近のニュースや季節の話題などを話し、利用者に質問したりしてリアリティ・オリエンテーションをおこなう。4年間約毎月1回観察してきた筆者のひとりの目から見ると、このときの職員と利用者のやりとりや、そのやりとりを見聞きしていることが、利用者の緊張感をほぐしグループへの帰属意識を高める機能を果たしているように思われる。

その後、昼食をとり1時半までそれぞれに休憩す

る。その間利用者はソファで休んだり、グループで歌う、将棋をする、会話を楽しむ、手遊びをする、花札・オセロなどのゲームをするというように自由に過ごす。職員は男女交替で食事をとり、いつも必ず何人かが利用者のなかに入って、それぞれの活動を盛り上げる役とか見守りの役を果たしている。

午後は、めいめいが職員の誘導や自身の希望で、箱づくり、籐細工、銅版画、ペーパーフラワー、刺繍裁縫、絵画、習字などの趣味活動を職員やボランティアの援助を受けつつおこなう。3時にはそれを終了し、お茶の時間となる。皆で会話をしながらおやつを食べ、3時半にはそれぞれ支度をして乗ってきた車に乗り帰宅していく。この他、ほぼ月に1回苑外活動か行事がおこなわれる。また、最低月に1度は体重測定と血圧測定をおこなう。なお、送迎は委託ではなく、男子職員が運転士、女子職員が1名付添いとして乗車する。職員は送迎時、家族との会話を心がけている。

## 2) デイ・ホームのプログラム評価の方法

Iセンターでは、各サービスの直接の利用者は高齢者であるが、かれらを在宅で介護・世話する家族も間接的な利用者と考え、高齢者も家族も満足できるサービスの提供を目指している。そうしたセンターのポリシーを前提として、デイ・ホームでは、高齢者にたいしては同年代の人々と交流することによって喜びや満足感を得てもらうことを第一の目的としている。そして、その喜びや満足感を通じて生活意欲が向上するとか、日常生活場面での行動や態度に好ましい変化が生じることを副次的なねらいとしている。家族にかんしては、できるだけ、コミュニケーションをとり相談にのるなどして、精神的に支援していくことを主な目的としている。高齢者がセンターを利用することによってまた、スタッフが精神的な支えになることによって、介護者・家族にも好ましい変化が生じることも副次的なねらいである。当該センターの上記のような目的、狙いがどのていど達成されているのかということによってデイ・ホームというサービスのプログラム評価をおこなうことにした。

方法としては、高齢者には面接調査を、家族（とくに高齢者を介護している人）には質問紙調査を計画した。高齢者にたいしての調査は1990年の9月に、高齢者のセンター利用にかんする意見を聞くという形で満足感などを聞いた。高齢者のなかで面接調査に対応できる人のうちから18名（軽度の痴呆性老人を含む）を職員にアット・ランダムに選んでもらいヒアリングした。筆者ともうひとりの研究者でおこなったが、それまでにセンターを訪問して一緒に活動をおこなっていたので、自然なかたちで主に昼食後の休憩時間に話を聞くことができた。対象とした人のほとんどの人が1991年度もセンターを利用している。

家族にたいする調査は、1991年度利用高齢者の介護者全員（75名）に、利用終了後の年度末（3月末）に調査用紙を郵送する方法でおこなった。返却されてきたもの（54）のなかから、記入項目がわずかであったものを除き、有効回答数を50とした。

## 3) 高齢者調査の結果

7項目にわたって自由に話を聞いた結果概要を記す。センター利用の経緯は、「家族の勧め」と「広報を見て・友人の勧めで」という者が半々である。初めて利用するときは、半数の人がうまくやっていたかどうか心配、「不安だった」と述べているが、利用し始めてからは、「前日からワクワクしている」とか、「前の日は興奮する」、「朝、早起する」「規則正しい生活ができるようになった」などと答え、センターに来所することが精神的なハリになっていることを示している。それまでは「一日中テレビを見ている」だけか、せいぜい「通院にでかける」だけだったのが、「センターに来るために外出できるようになった」という人も半数いた。

利用の楽しみは、「同年代の人とおしゃべりできること」、「人の会話を聞いていること」、「雰囲気が良いこと」といった人との交流があげられた他、家族にもなかなか連れて行ってもらえない所へ連れて行ってもらえる苑外活動や、「大勢で食事ができること」をあげた人もいる。楽しみとして、体

操や午後の趣味活動そのものよりも、人との交流、対人関係をあげる人が多いのは、デイ・ホームの目的に従って職員がグループとしての雰囲気づくりや交流の促進を心がけている結果であると言えることができるだろう。

センターで友人づくりができ、センター外でも「家がわりと近い人とときどき行来きしている」とか、「電話で話す」という人が半数いた。いずれも女性である。

午後の趣味活動については、どう思うか聞いたところ「作品を持って帰って家人に見せられることが嬉しい」とか、「孫のために作ってやれるのでやりがいがある」、「形として残るのが嬉しい」と述べ、全員が満足感を示した。新しい趣味活動としてはどんなものをやってみたいかという問いには、以前やっていた「陶芸」と答えた人の他には、具体的に答えた人はいない。「自分ではなにをしていいかわからない」、「今で満足」、「職員からこれをやってみましょうと言われたほうがいい。私たちの時代、とくに女性は自分からなにか進んでしようとは考えて生きてこなかったから」といった回答が多かった。いくつか新しい活動内容を提示して尋ねたならば、具体的にやりたい活動を選択したかもしれない。

また、午前中皆でおこなう体操についても同じように尋ねたところ、「杖なしで歩けるようになった」、「以前よりも歩けるようになった」、「身体を動かす機会としてよりハビリになっている」と概ね好評である。ただし、「もう少し話より体操に力を入れて欲しいが、障害の重い人もいたので難しいかもね」とやや不満を表す人もあった。

職員にたいしては、「皆公平で親切」、「めんどろ見がいい」、「気持ちよく過ごせるのは職員のおかげ」、「安心して過ごせる」と言って全員が職員に感謝の意を表していた。ただし、「甘すぎると感じるときがある」とか「指示してもらわないと動けないからどんどんリードして欲しい」、「手芸などの指導をしてくれる人がもう少しいて欲しい」といったやや不満の意見もでた。

利用回数については、10名が「2回がちょうどいい」とか「週2回というペースが生活の一部にな

っている」と答えているが、「祝日などで週1回になったときはさびしい、がっかりする」とか「3回くらいあってもよい」、「毎日あってもよい」と答えた人が5名もいた。

以上のことから、高齢者自身は、現在の午前の体操、給食、午後の趣味活動、苑外活動といったデイ・ホームの活動と職員の対応にかんして、体操、職員の対応、通所の回数に多少の不満や希望がないわけではないが、おおむね満足していると言えることができよう。利用者は他の機関のサービスを利用しているわけではないので、他と比較して述べたのではなく、日頃感じていることとして率直に話してくれた。そういう印象をもとに、筆者たちは上記のように判断した。

また、当センターが第一の目的としている同年代の人々との交流の促進という点についても、高齢者たちは交流を楽しみとしており、この目的は達成されていると言ってよいだろう。センターでの交流がきっかけとなって、センター外でも交流が始まっていることは、本サービス・プログラムがプラスの副次効果も生み出していることを示している。

#### 4) 家族調査の結果

回答者（介護者）の高齢者にたいする続き柄は表2、これらの介護者が世話したり介護している高齢者の特徴は表3から表6に、介護時間については表7に示した。表に示すDGは痴呆性老人のグループ（本人および介護者）、NDGというのは非痴呆性老人のグループを指す。痴呆性老人かどうかの判断は、医師の診断書の他、失見当、記憶力障害、判断や抽象的思考の障害、妄想、徘徊、異食などの問題行動の有無、意思疎通の困難さなどを総合して、スタッフが判断した。DGが15名、NDGが35名である。人数が少ないので、以下で両グループを比較するばあいはおおよその傾向を指摘するにとどめる。

介護者は全体では、娘と嫁、配偶者がそれぞれ3割でいどである。利用高齢者は女性が約8割、年齢は70歳代が約6割と多い。また、家族類型では三世代家族が約6割となっている。高齢者のADL等

は、全体では歩行の「自立」者（杖歩行の者の含む）が6割弱となっているが、NDGでは「一部介助」と「全介助」が5割となっている。発語が「やや難」と「難」の人は全体では3割強、意思疎通が「やや困難」と「難」の人が全体では3割弱、DGだけでは7割強となっている。一日の介護時間は、「1, 2時間ていど」と「半日ていど」が全体で5割弱であるが、DGでは「日中ほとんど」と「昼夜をとおして」が4割近い。

表2 回答者の続柄

		計 (%)					
		計	妻	夫	娘	嫁	その他
全	体	100.0	18.0	12.0	32.0	30.0	8.0
D	G	100.0	—	20.0	46.7	26.7	6.7
N	D G	100.0	25.7	8.6	25.7	31.4	8.6

表3 利用高齢者の性別

	計	男性	女性	
全	体	100.0	24.0	76.0
D	G	100.0	13.3	86.7
N	D G	100.0	28.6	71.4

表4 利用高齢者の年齢

	計	65歳未満	65-69歳	70-74歳	75-79歳	80-84歳	85-89歳	90歳以上	
全	体	100.0	2.0	8.0	22.0	36.0	16.0	14.0	2.0
D	G	100.0	—	13.3	20.0	40.0	20.0	6.7	—
NDG		100.0	2.8	5.7	22.8	34.3	14.3	17.1	2.8

表5 利用高齢者の家族類型

	計	本人・配	本人・(配)・息子	本人・(配)・娘	本人・(配)・息子の配	本人・(配)・娘の配	本人・(配)・息子の配・孫	本人・(配)・娘の配・孫	その他	
全	体	100.0	12.0	6.0	12.0	4.0	6.0	42.0	14.0	4.0
D	G	100.0	6.7	—	20.0	—	—	53.3	20.0	—
NDG		100.0	14.3	8.6	8.6	5.7	8.6	37.1	11.4	5.7

表6 利用者高齢者のADL等

		計	自立	一部介助	全介助	
着替	全	体	100.0	62.0	36.0	2.0
	D	G	100.0	75.0	—	25.0
	NDG		100.0	57.1	42.9	—
排泄	全	体	100.0	84.0	14.0	2.0
	D	G	100.0	80.0	13.3	6.7
	NDG		100.0	85.7	14.3	—
歩行	全	体	100.0	58.0	40.0	2.0
	D	G	100.0	73.3	26.7	—
	NDG		100.0	51.4	45.7	2.9
		計	普通	やや難	難	
発語	全	体	100.0	68.0	28.0	4.0
	D	G	100.0	66.7	26.7	6.6
	NDG		100.0	68.6	28.6	2.8
意思疎通	全	体	100.0	72.0	22.0	6.0
	D	G	100.0	26.7	53.3	20.0
	NDG		100.0	91.4	9.6	—

表7 一日の介護時間

	計	1~2時間ていど	半日ていど	日中ほとんど	昼夜をとおして	ともに必要なし	NA	
全	体	100.0	26.0	22.0	12.0	8.0	22.0	10.0
D	G	100.0	20.0	26.7	26.7	13.3	6.7	6.7
N	D G	100.0	28.6	20.0	5.7	5.7	28.6	11.4

高齢者がセンターでの活動に満足しているかどうか、介護者に尋ねたところ表8のような結果となった。高齢者調査ではいくつかの側面について尋ねたが、介護者は直接の利用者でないのと同じように細かく尋ねることはできない。日頃介護・世話している目から見て、全体として高齢者が本サービス利用を満足していると思うかどうかとたずねた。

結果は、「大変満足していると思う」と「まあまあ満足していると思う」をあわせるとほぼ100%となる。DGよりもNDGのほうが「大変満足していると思う」の回答が多いが、これは本人の話ぶ

りや態度などから判断したのであろう。DG, つまり痴呆性老人のばあい意思疎通の困難な人が多く、推測して答えた介護者が多いので「まあまあ満足していると思う」が相対的に多くなったのだと思われる。次年度もセンターを利用させたいという希望があるため、満足していると思うという回答が多くなったという面が考えられなくはない。だが、先の高齢者調査でも高齢者はおおむね満足しているという結果がでており、介護者も実際そのように感じていると思われる。

表8 センター活動の満足度にかんする認識

	計	大変満足している	まあまあ満足している	あまり満足していない	満足していない	NA
全体	100.0	74.0	24.0			2.0
D G	小計	100.0	53.3	46.7		
	計	100.0	50.0	50.0		
	継	100.0	54.5	45.5		
NDG	小計	100.0	82.8	14.3		2.9
	計	100.0	80.0	20.0		
	継	100.0	85.0	10.0		5.0

表に示した「新」と「継」は、調査年度新規利用のグループと前年度からの継続利用のグループとを表す。継続利用グループよりは新規利用グループのほうに、満足感がより多く表れると予想していたが、結果はあまり差がなかった。

つぎに、高齢者がデイ・ホームを利用したことが、また、職員の心がけている家族とのコミュニケーションが、家族にとって精神的な支えになっているかどうかという点について。

これは、家族とくに介護者自身にとってセンター利用がどのような意味をもっているかという形で聞いた。結果は表9のとおりである。複数回答で尋ねたところ、もっとも多かったのが「精神的負担が多少減る」で全体では8割強、そのつぎが「いざというときに相談できるという心強さがもてた」で7割強である。とくに痴呆性老人をかかえるDGでこれらが相対的に多い。DGには「年寄りと離れて

気分転換できる」という選択肢も多く選ばれている。痴呆性老人をかかえる介護者のほうが相対的に強い負担感を感じているからであろう。選択肢を選んだ数がDGでひとり当たり3.2個、NDGで2.2個というものも、そうした点を示唆している。

表9 介護者にとってのセンターの意味

(M.A)

	計	肉体的負担の減	精神的負担の減	ええって面倒ふ	かえって面倒ふ	年寄りと離れて気分転換できる	いざというときに相談できる心強さ	NA
全体	252.0	42.0	82.0		52.0	72.0	4.0	
D G	小計	320.0	53.3	100.	—	80.0	86.7	—
	計	275.0	25.0	100.	—	75.0	75.0	—
	継	336.4	63.6	100.	—	81.8	90.9	—
NDG	小計	222.9	37.1	74.3	—	40.0	65.7	5.7
	計	213.3	26.7	66.7	—	46.7	66.7	6.7
	継	230.0	45.0	80.0	—	35.0	65.0	5.0

新規利用グループと継続利用グループとでは、DG, NDGともに継続利用グループのほうが「肉体的負担が多少減少する」をあげた人が多い。ひとり当たりの選択数も相対的に多くなっている。1年以上利用していくほうが、介護者にとって肉体的負担感の減少というセンター利用の意義を強く感じるということであろうか。いずれにせよ、当センターでのデイ・ホームのプログラムが、大多数の介護者にとって精神的な支援という機能を果たしていることが理解される。家族にたいする主たる目的はほぼ達成されているといえよう。

では、副次的なねらいとしていたデイ・ホーム利用による高齢者の家庭での変化はどうか。高齢者の日常生活における行動や態度等の変化を客観的に把握しようとするならば、前もって作成した調査票を利用前に介護者に渡して記入してもらい、利用後にもう一度その時点での状況を記入してもらって、それらを比較するという方法が考えられる。しかし、今回はその方法とらなかった。客観的な利用前と利用中、利用後の高齢者の状態の客観的なアセスメントは、センターにおける状態に限定



されるが職員によっておこなうことができる。だから、介護者にあまり負担をかけないようにしたいということがひとつの理由。

また、高齢者の客観的な状態の変化よりも、デイ・ホームの利用によって高齢者にどのような変化があったと介護者が認識しているのかということが、その介護意欲に影響を与えると考えられる。だから、主観的な変化にかんする認識を聞くことも重要である。これも理由の一つであった。従来の研究からも、この介護意欲が在宅介護継続の重要な条件であることがあきらかになっている。

デイ・ホームを利用開始時点と年度内の利用が終了した時点とを比べてみてこの1年間でつぎの点にかんしてお年寄りに変化が見られましたかという形式で、つぎの9項目について尋ねた。センターでの活動内容等自分についての話、顔つきや表情、笑顔、歩行動作・移動動作、全体としての体の動き、生活の規則性、文句やごごと・グチ等、センターに行かない日の生活、センターから帰ってきたときの機嫌。

このうち6項目の結果について表10, 11, 12に示した。まず、顔つきや表情にかんしては、全体では3.5割が「以前より良くなった」としている。DGとNDGの差異はほとんどないが、NDGでは新

表10 高齢者の変化(1)

		<顔つきや表情>				<笑顔>				
		計	く な つ た	変 わ り な い	く な つ た 以 前 よ り 悪 い	N A そ の 他	く な つ た 以 前 よ り 多 い	変 わ り な い	く な つ た 以 前 よ り 少 い	N A そ の 他
全 体		100.0 (N・50)	36.0	54.0	4.0	6.0	36.0	50.0	10.4	4.0
D G	小計	100.0 (N・15)	33.3	53.3	13.3	-	26.7	46.7	26.7	-
	新	100.0 (N・4)	25.0	50.0	25.0	-	-	50.0	50.0	-
	継	100.0 (N・11)	36.4	54.5	9.1	-	36.4	45.5	18.1	-
NDG	小計	100.0 (N・35)	37.1	54.3	-	8.6	40.0	51.4	2.9	5.7
	新	100.0 (N・15)	53.3	40.0	-	6.7	60.0	33.3	-	6.7
	継	100.0 (N・20)	25.0	65.0	-	10.0	25.0	65.0	5.0	5.0

規利用グループのほうが継続利用グループよりもその割合が多い傾向が見られる。「変わらない」という回答が全体では半数を越えるが、DGには「以前より悪くなった」という回答も若干見られる。笑顔は全体では「以前より多くなった」がやはり3.5割で、DGとNDGを比較するとNDGに多い傾向が見られる。とくにNDGの新規利用グループでは、この回答が6割と多くなっている。

歩行動作・移動動作にかんしては、「以前よりうまくなった」という回答は、全体では1.5割でいどである。ただし、歩行動作・移動動作に一部介助を必要とする高齢者が半数近くを占めるNDGでは、2割弱が「以前よりうまくなった」としている。DGでは「変わらない」が半数強いるが、NDGの継続グループの4割は「以前より下手になった」と答えている。全体の動きについても、ほぼ同じような傾向がでている(表11)。

表11 高齢者の変化(2)

		<歩行動作・移動動作>					<全体の体の動き>				
		計	た う ま く な つ た	変 わ り な い	た 下 手 に な つ た	N A そ の 他	た う ま く な つ た	変 わ り な い	た 下 手 に な つ た	N A そ の 他	
全 体		100.0	14.0	48.0	32.0	6.0	18.0	44.0	32.0	6.0	
D G	小計	100.0	6.7	53.3	40.0	-	6.6	46.7	46.7	-	
	新	100.0	-	50.0	50.0	-	-	50.0	50.0	-	
	継	100.0	9.1	54.5	36.4	-	9.1	45.5	45.5	-	
NDG	小計	100.0	17.1	45.7	28.6	8.6	22.9	42.9	25.7	8.5	
	新	100.0	20.0	60.0	13.3	6.7	26.7	53.3	13.3	6.7	
	継	100.0	15.0	35.0	40.0	10.0	20.0	35.0	35.0	10.0	

生活の規則性にかんしては全体では2.4割が「規則的になった」としている。DGとNDGではそれほど差異がないが、DG、NDGとも新規利用グループのほうにこの回答がやや多い傾向が見られる。文句やごごと・グチを言うことにかんしては、「以前より言わなくなった」は全体ではやはり2.4割でいどである。「言わなくなった」のは、NDGの新規利用グループにやや多い傾向が見られる(表12)。

表12 高齢者の変化(3)

		<生活の規則性>					<文句やことごと>			
		計	つ規則的にな	変わりない	つ不規則にな	NAその他	つ言わなくな	変わりない	多くな	NAその他
全体		100.0	24.0	64.0	6.0	6.0	24.0	46.0	16.7	14.0
D G	小計	100.0	20.0	60.0	20.0	-	26.7	46.7	20.0	6.6
	新	100.0	25.0	25.0	50.0	-	-	50.5	50.5	-
	継	100.0	18.2	72.7	9.1	-	36.4	45.5	9.1	9.1
NDG	小計	100.0	25.7	65.7	-	8.6	22.8	45.7	14.3	17.1
	新	100.0	33.3	60.0	-	6.7	33.3	40.0	6.7	20.0
	継	100.0	20.0	70.0	-	10.0	15.0	50.0	20.0	15.0

なお、職員がそれぞれの高齢者について、毎回利用日につけていたケースの記録の1年分をまとめた資料と、個々の介護者の質問紙調査の結果を照らし合わせてみて、職員のとらえた高齢者の状態の変化の有無およびその内容と、介護者が認識している変化の有無・内容とを対比させて、両者の認識のズレがどのくらいあるかをとおおよそ調べてみた(表13)。全体では両者の認識に「あまりズレなし」が5.6割で、「ややズレあり—介護者が職員よりプラスの評価を強くしている」が2割強、「ややズレあり—介護者が職員よりマイナスの評価を強くしている」が1割強、である。「かなりのズレあり」はごくわずかである。このことから、介護者

表13 ケース記録における職員のアセスメントと介護者の評価ズレ

		上段実数 下段比率				NA	
		あまりズレなし	ややズレあり		かなりズレあり		
			介がよりプラス	介がよりマイナス	介がよりプラス		介がよりマイナス
D G	新	1	1		2		
	継	7	3	1			
NDG	新	12	2			1	
	継	8	5	5	1	1	
全体	N=50 100.0	28 56.0	11 22.0	6 12.0	1 2.0	2 4.0	

注 介=介護者

の変化にかんする評価は、調査時点での介護者の気分などによって左右された結果というよりも、かなり客観的なものに近いものであったといえる。「あまりズレなし」がもっとも多かったのはNDGの新規グループであった。<sup>4)</sup>

以上の結果をまとめると、顔つきや表情とか笑顔といった高齢者の生活の満足感や精神的な安定度を示すと思われる項目にかんしては、全体では3.5割の人が、生活の規則性や文句やことごとを言うという生活態度を示すと思われる項目にかんしては全体で2.4割の人が、歩行動作・移動動作や全体の動きという身体的側面にかんしては全体では1.5割弱の人が高齢者に好ましい変化が見られたとしている。とくに、DGよりはNDGで、NDGのなかでも新規利用グループのほうに、こうした変化が相対的に多く認識されている。

なお、身体的側面にかんしていえば、好ましい変化が見られたと評価する介護者は少ないが、「以前と変わらない」と評価する人はNDGでも4割強いる。たまに通院するため外出するがあとはほとんどテレビを見ているだけという高齢者が多いことを考慮すれば、センターへの通所とプログラム参加が身体機能低下予防にかなり役立っているといえる。

これらのことからデイ・ホームの利用によって高齢者の日常生活における好ましい変化が生じることという副次的なねらいは、とくに高齢者の心理的側面や生活態度面においては、利用者の4分の1から3分の1の人に達成されているといえよう。とくに非痴呆性老人で新規に利用した人により顕著であると言ってよい。

最後に、デイ・ホームを利用したことが介護者自身の日常生活にどのような好ましい変化をもたらしたかという、家族にたいする当センターの本サービス・プログラムの副次的な狙いの達成状況をみてみる。

「昨年の今ごろと現在を比較してみると、お世話なさっている方につきのような変化が見られましたか」ということで、つぎの8項目にかんして尋ねた。日頃の外出、自分の時間、気分、介護や世話の負

担感、体の調子、介護や世話にかんする悩み、介護や世話の方法にかんする知識、センターや老人ホームについての理解。このうちから6項目の結果について表14、15、16に示した。

日頃の外出にかんして、「以前よりは外出しやすくなった」が選択された割合は、全体では3割であるが、DGでもNDGでも新規利用グループでは、5割近い。自分の時間にかんして、「以前よりは多くもてるようになった」は全体では3.5割弱であるが、これも新規利用グループでは5割近くになっている(表14)。

表14 介護者の変化(1)

	計	<日頃の外出>				<自分の時間>				
		つたやすくな	変わりのない	つたにくくな	NAその他	多くもてるようになった	変わりのない	つたてなくな	NAその他	
全体	100.0	30.0	48.0	12.0	10.0	34.0	52.0	8.0	6.0	
DG	小計	100.0	26.7	40.0	20.0	13.3	33.3	53.3	13.3	
	新	100.0	50.0	25.0	25.0	-	50.0	50.0		
	継	100.0	18.2	45.5	18.2	18.2	27.3	54.5	18.2	
NDG	小計	100.0	31.4	51.4	8.6	8.6	34.3	51.4	5.7	8.6
	新	100.0	46.7	33.3	6.7	13.3	53.3	26.7	6.7	13.3
	継	100.0	20.0	65.0	10.0	5.0	20.0	70.0	5.0	5.0

気分にかんしては「以前より気がラクになった」は全体では4.5割弱で、新規利用グループとくにNDGのそれでは8割と高くなっている。介護の負

表15 介護者の変化(2)

	計	<気分>				<介護の負担感>				
		楽になった	変わりのない	つた気が重くな	NAその他	減った	変わりのない	ふえた	NAその他	
全体	100.0	44.0	36.0	16.0	4.0	28.0	40.0	22.0	10.0	
DG	小計	100.0	33.3	46.7	20.0	-	26.7	40.0	26.7	6.7
	新	100.0	50.0	25.0	25.0	-	25.0	25.0	50.0	-
	継	100.0	27.3	54.5	18.2	-	27.3	45.5	18.2	9.0
NDG	小計	100.0	48.6	31.4	14.3	5.7	28.6	40.0	20.0	11.4
	新	100.0	80.0	6.7	6.7	6.7	46.7	33.3	13.3	6.7
	継	100.0	25.0	50.0	20.0	5.0	15.0	45.0	25.0	15.0

担感が「以前より減った」は全体で3割弱であるが、NDGの新規利用グループでは4.7割となっている(表15)。体の調子が「以前より良くなった」は全体で1割に満たない。介護にかんする悩みが「以前より少なくなった」は2.5割強で、やはりNDGの新規利用グループでは4.5割強と相対的に高くなっている(表16)。

表16 介護者の変化(3)

	計	<体の調子>				<介護の悩み>				
		良くなった	変わりのない	悪くなった	NAその他	た少なくな	変わりのない	多くな	NAその他	
全体	100.0	8.0	64.0	16.0	12.0	26.0	32.0	28.0	14.0	
DG	小計	100.0	13.3	66.7	13.3	6.7	20.0	33.3	40.0	-
	新	100.0	-	75.0	25.0	-	25.0	-	75.0	-
	継	100.0	18.2	63.6	9.1	9.1	18.2	45.5	27.3	9.0
NDG	小計	100.0	5.7	62.9	17.1	14.3	28.6	31.4	22.9	17.1
	新	100.0	13.3	60.0	13.3	13.3	46.7	26.7	6.7	20.0
	継	100.0	-	65.0	20.0	15.0	15.0	35.0	35.0	15.0

日頃の外出や自分の時間という物理的な時間の余裕という点では、全体で3割、気分がラクになったとか介護の負担感が減ったという精神的な余裕にかんしてもほぼ3割から5割弱の介護者が好ましい変化が生じたとしている。ただし、介護の悩みが減ったという評価はやや少なく、体の調子がよくなったという評価はさらに少ない。NDGの新規利用グループではこれら好ましい変化を指摘する割合が相対的にかなり高い。

これらの結果から、デイ・ホームの利用とスタッフとのコミュニケーション等により、介護者にも好ましい変化が生じることという副次的な狙いは、時間的な余裕、精神的な余裕が生じた・増したという変化として介護者からの3割から5割の人で達成されている。とくに非痴呆性老人をかかえていて初めて本サービスを利用した新規利用グループに、これらの傾向がより強く表れている。

なお、高齢者の変化にかんする評価と介護者の在宅でお年寄りを世話していくという介護意欲とをクロスしてみた。高齢者の変化にかんする評価に

かんしては、好ましい変化があったという答えに+1点、変化なしに0点、好ましくない変化に-1点を与えて合計点を出し、その点数を3段階に分けて、介護意欲の分布をみた(表17)。これによれば、DGでは、介護者が総体として高齢者のプラスの変化を認識しているか、「変化なし」と認識していると、「なんとか続けていけると思っている」という回答が相対的に多く、総体としてマイナスの変化を認識していると、「続けていくことはむずかしいと思っている」と「わからない」が多くなっている。NDGだけでも、ほぼ似た傾向が見られるが、プラスの変化を認識している人で「わからない」と答えた人がやや目立っている。しかし、全体としてはやはり、高齢者の変化にかんする認識と介護意欲はあるていど関連していると推測される。

なお、職員にかんする質問を7項目にわたっておこなった結果から、3項目選んで表18に示した。これによれば、話しやすさにかんしては全体で7割の人が高く評価しており、家族の気持ちの理解にかんしては4.5割の人が高く評価している。今後なにかあったら相談したいと思うかと言う点について

表17 高齢者の変化にかんする評価×介護意欲

		計	なんとか続けていける	続けるのはむずかしい	わからない	その他・NA
D G	+1点以下	5	5			
	0点	3	3			
	-1点以下	7	3	2	2	
NDG	+1点以上	21	16		3	2
	0点	2	2			
	-1点以下	10	7		2	1
		N A	2			
全体	+1点以上	26 100.0	21 80.8		3 11.5	2 7.6
	0点	5 100.0	5 100.0			
	-1点以下	17 100.0	10 58.8	2 11.8	4 23.5	1 5.9
			N A	2		

表18 職員にたいする評価

		<話しやすさ>				<家族の気持ちの理解>				<今後の相談希望>				
		計	大変話しやすい	まあまあ話しやすい	あまり話しにくい	わからない・NA	強く思う	たぶん思う	そう思わない	わからない・NA	強く思う	たぶん思う	そう思わない	わからない・NA
全体		100.0	72.0	20.0	-	8.0	44.0	48.0	-	8.0	52.0	36.0	-	12.0
D G	小計	100.0	73.3	26.7	-	-	46.7	53.3	-	-	66.7	33.3	-	-
	新	100.0	50.0	50.0	-	-	50.0	50.0	-	-	50.0	50.0	-	-
	継	100.0	81.8	18.0	-	-	45.5	54.5	-	-	72.7	27.3	-	-
NDG	小計	100.0	71.4	17.1	-	11.4	42.9	45.7	-	11.4	45.7	37.1	-	17.1
	新	100.0	73.3	13.3	-	13.3	33.3	22.9	-	13.3	60.0	20.0	-	20.0
	継	100.0	70.7	20.0	-	10.0	50.0	40.0	-	10.0	35.0	50.0	-	15.0

は5割強の人が強く肯定している。DGとNDG、新規利用グループと継続利用グループとでとくに大きな差は見られないが、DGで継続利用グループのほうが相対的に職員にたいする評価が高いように思われる。これらのグループの介護者にたいして、職員が積極的に働きかけることが相対的に多いためと考えられる。

### 3 デイ・サービスの個別援助実践評価

#### 1) 個別援助実践評価の方法

つぎに、デイ・ホームの全体的活動を実践しながらおこなわれる、個々の利用者にたいする職員の対応実践についての評価研究に移る。

デイ・ホームの利用者それぞれにたいして、職員が個別的に設定したサービス提供目的、つまり個々のケースにたいする対応目的と課題が、利用期間中にどのていど達成されたかを評価するために、1年間のケース記録と個別サービス・プランニング票を資料として用いた。

Iセンターは以前からサービス利用者全員についてケース記録をつけていたが、1990年度から、体調、表情、活動参加状況、他の利用者との対話、職員との対話、食事、排泄、その他の8つの視点から、利用者の状況を毎回チェックし変化の有無や内容を記入している。

個別サービス・プランニング票 (individual service planning = ISP)<sup>5)</sup> は、職員と相談のうえ作成した。利用開始後ほぼ3ヶ月の時点でケース (利用者本人と家族の双方) の現状と問題点・ニーズ、強さ (持っている強み・長所) を職員がアセスメント (査定) し、対応目的と課題を計画、記入する。そして、ほぼ3ヶ月経った利用開始後6ヶ月の時点で、その課題達成状況を評価し、その課題を継続するか新たな課題を設定する旨記述する。同じように、利用開始後9ヶ月、1年の時点で課題評価と課題達成設定をおこなう、というものである。全部で3回課題設定をおこなうことになる。

1回目のアセスメントやその後の課題達成状況の評価にかんしては、今回はチェック項目を始めか

ら定めていない。職員ができるだけケースの個別性を重視してアセスメントし課題設定と評価ができるように、自由に記入できる枠組みだけを用意した。なお、1回目のアセスメントが利用開始後3ヶ月経ってからというのは、後述するようにセンター側の事情から、このていどの観察期間が必要であったためである。

このISPを職員が記入していくことは、あるていどの長さの期間におけるケースの変化をみることになるので、毎日のケース記録の記入よりもケースへの対応の適切さを自覚しやすいはずである。ISPの記入は職員の教育的意味を持っているわけだが、今回実際には職員のなかの2人がその都度協議しながら記入するという形が取られた (本年度はISPをやや構造化し、全員の職員によって記入してもらっている)<sup>6)</sup>。なお、ケース記録はこれまでも全員の職員によって記入されている。

このISPとケース記録をもとに、利用開始前の事前家庭訪問調査の結果および先に紹介した家族調査の結果も加えて「個別データ」を作成した (ISPおよびケース記録は利用者全員75名にかんして作成されていたが、「個別データ」は家族調査回答者のケース50にかんして作成)。個別援助実践評価にかんする分析結果を示す前に、「個別データ」の1事例を紹介する。事例のなかの「」内の文章はケース記録およびISPに記録されている職員の文章をそのまま載せたものである。

#### 2) 「個別データ」事例

DG 継 女性 70歳

##### \*プロフィール

夫 (71) および長女家族 (長女、孫男女1人ずつ) と一戸建て住宅に済む。専用の老人居室で生活する。4年前にくも膜下出血で2回倒れた。1週間に1度リハビリテーションのため通院している。右片麻痺である。痴呆症の診断書は出ていないが、家族は痴呆症状があると述べている。ADLは摂食が自立の他は介助が必要で、着替え、洗面、歩行は「一部介助」、入浴、排泄は「全介助」である。発語と意思疎通は「やや難」と「まったく出来な

い」の中間と判断された。排泄は日中はトイレ介助であるが、夜間はオムツ使用である。入浴は市の巡回サービスを利用、その他に訪問看護婦の派遣、紙オムツの支給、ショートステイと言ったサービスを利用している。また、車椅子をレンタル会社から借りている。日中はテレビを見ていることが多い。家族は「大勢の人のなかで刺激を受けることが本人に良いと思われるので」デイ・サービスを申請したと語っている。

### 1) 1回目の問題・ニーズのアセスメントとプランニング

#### (1) ケース記録(初回利用日4.10~7.24)より

昨年度に引き続きの利用である。初日は「自己紹介が始まるとニコニコして聞いていた。午後は居眠りをしていた。その後も午前中から居眠りをすることもあるが、午後の作業活動中居眠りをすることが多い。「とくに動きなく周囲を見て過している」こともあったが、ボランティアさんと一緒に箱づくりをする」こともある。4月末の段階で「とくに変化は見られないが、全体的に向上が見られる」という記載がある。5月には「午後の活動を職員とともにやる。以前には見られないことである」また、送迎時の観察によると「近所の人についても判断できる様子」が見られた。デイにオムツをしてきてることがあるが、これは朝排泄がなかったとき家族がさせている。

6月に入ると「送迎時いつもより足の運びが良好」とか、「つかまり歩きで片方の手を持つ介助の方が居室内を早く歩いた」「車の乗降時足の運びが順調」といった記載が目につく。職員の声かけにときどき発語するが、自分から何かを言うことは見られない。午前中は「眠ることなく笑顔が多い」日が続く。いつものように「昼食後トイレ誘導するも排尿なし。その後移動中に座りながら尿がでしてしまう。本人が気がつかず」ということもあった。

7月に1度、家庭の都合で欠席したが、その後、「近頃、体操時、常に笑顔で受け身的、他動的にしか手足を動かさなかったが、本日はひとつひとつの動作を職員を見ながらやる」「発語も多い」という変化も出た。ただし、午後は昼寝することが続

く。これにかんしては「無理して起こさず」という対応をしている。

#### (2) ISPのアセスメントとプランニング(7.24)

問題は「家庭において昼夜の逆転があることでセンターでの活動中もウトウトすることが多い」ということである。前年度の家庭訪問時のさいのADL判定で「一部介助」としていた着替え、洗面、歩行などは、この時点で「一部介助」と「全介助」の中間と判定され、発語も「まったく出来ない」に変化したと判断されているようにADLの低下が見受けられるが「ADLの低下も知的・意識レベルの問題によるところが大きいと思われる」と職員は判断している。また、「通所中午後の活動がほとんど見られないことも、昼夜の逆転につながっていると考えられる」としている。

そこで、「昼夜の逆転を抑制すること」を目的として、センターにおいて「動作、会話などにたいして意識をもたせるよう働きかけ、寝ないようにすること」を課題としている。とくに、「午前中は職員が対応可能であるが、午後の活動において対応しきれていない面がある。何かを作るのではなく会話に心がけコミュニケーションを図るようにする。ただし、職員のペースで動くのではなく時間をかけ待つ対応を忘れないようにする」よう配慮することとしている。

### 2) 1回目の課題達成評価と2回目のプランニング

#### (1) ケース記録(7.27~8.3)より

この時期は始めショートステイを利用しており、ショートステイの居室からデイの方に参加している。「ショートステイ利用中であるが、変わりなく落ち着いている」状態であった。ところが8月3日よりリハビリテーションを目的としてTナーシングホームに入院することになる。

#### (2) ISPの課題達成記述とプランニング(10.11)

入院しているため評価できず。「まもなく退院予定、身体上の変化も考えられるが、対応の課題は先のとおり」

### 3) 2回目の課題達成評価と3回目のプランニング

#### (1) ケース記録(11.27~2.1)より

11月末から再び通所開始。「歩行は入院前より悪く、介助者に体重をかけてやっつである。」「入院中はオムツを使用、食事も箸が使用できずスプーンであったとのことだったが、昼食のウドンは箸を上手に使う。」また「いつもの笑顔がでていたが活動中はやはり居眠りが多い。」次の日も「非常に眠そうであったが、なるべく寝ないように働きかける」といった状態であった。その後も眠そうにしていたり、寝てしまったりする日が続く。ときたま作業のノリづけなどをやることもあった。1月に入ってから今年度2度目のショートステイを利用。ショートの家からデイに通ってくる。

#### (2) ISPの課題達成記述とプランニング (2.6)

ケース記録のとおり、出来るだけコミュニケーションをとって眠らないようにするという課題は働きかけにもかかわらず十分成功するまでにはいたっていない。家庭での昼夜逆転がまだ継続しているかどうかについての確認は、この段階ではとっていない。

今後の課題もこれまでと同じとしている。

#### 4) 3回目の課題達成評価とプランニング

##### (1) ケース記録 (2.4~3.29) より

2月は始めから風邪で4回欠席する。途中「家族が医者に連れていっている様子がないので、家族に通院することを勧める。」その後「トイレで多量の排尿があり、座りながら服を汚すまでの日もある」ということもあったが、「表情よく笑顔も多い」また「食事もよく食べる」日が続く。しかし、午後の活動では寝ていることが多く、たまに「今日はあまり居眠りしなかった」という記載がある。3月に入って他のホームのショートステイ利用のため2度ほど休む。本年度の利用が終了に近付いたころ「天気よいためか体調良好で足の運びもよい」「一日中目を覚ましており作品を完成させる」とか「職員と楽しそうに食事した」といった状態がみられた。

##### (2) ISPの課題達成記述 (4.12)

最後になって「多少の変化がみられた。ただし、この状態が安定して継続しているとは判断しにくく全体としてはあまり変化なし」としている。

#### 5) 1年間利用してみた段階での家族による評価

##### (1) 本人の満足度と家族のセンター利用の意味

介護者である娘は本人の満足度にかんして「まあまあ満足していると思う」と答え、自身にとってセンター利用は「肉体的な負担が多少減る」「精神的な負担が多少減る」「年寄りと離れて気分転換ができる」「いざというときに相談ができる心強さをもてた」と、回答している。

##### (2) 1年間利用してみて感じる高齢者の変化

全体に「変化なし」の指摘が多く、プラスの変化の指摘はない。「以前より下手になった」というのは歩行動作、移動動作と全体の体の動きである。この点は職員の認識と同じである。

##### (3) 1年間利用してみて感じる介護者の変化

これも「以前と変わらない」がほとんどである。ただし、介護方法などの知識は「以前より多くなった」としている。

##### (4) 介護者の日頃の悩み・気持ち

日頃の悩みとしては「体が疲れる」「イライラすることが多い」を挙げているが、「世話をするのは当たり前だと思っている。」今後の世話についても「なんとか続けていけると思っている」ので、老人ホームや老人病院にかんしては、「これまでに入所や入院を考えたことがあるが、現在はとくに考えていない」としている。

#### 3) 個別援助実践評価の結果

個別援助実践の評価は、個々のケースについておこなうものである。課題が達成されたか否か、達成しなかったとすればそれはなぜか、課題は妥当であったかどうかなどを問う。しかし、個々のケースについての見当は別稿でおこなうことにし、本論では利用者全体として、課題達成状況がどのようなものであったか、どのようなプロセスで達成されたかといった点を見ることにした。個々のケースの実践対応を詳細に検討して行く前に、当センターの全体傾向をつかむためである。

表19-1、19-2、および表20と21が、50の「個別データ」をもとに個別援助実践を評価した結果である。

まず、表19-1、19-2、の課題欄には、個々

表19-1 各ケースの課題と達成状況(1)

課 題		1回目	2回目	3回目
D G 新				
No. 1	他の人との交流促進	0	0	1
No. 2	現状維持	1	0	?
No. 2 家	介護者の痴呆理解を求めめるための話し合い→より多く接触すること	0	1	0
No. 3	現状維持のための見守り	1	1	1
No. 4	現状維持	-	1	0
No. 4 家	夫の負担軽減を図ることと夫の観察	-	?	?
D G 継				
No. 5	嫁と本人の間のパイプ役と嫁への思込みを訂正する形で話を聞く	1	0	0
No. 6	理解可能な活動を提供しマンツーマンで活動意欲を引き出す	0	0	0
No. 6 家	家族の負担軽減	?	?	?
No. 7	課題設定なし	...	...	...
No. 7 家	家族の不安軽減のためコミュニケーションをふやす	1	1	1
No. 8	参加進めるため活動内容に変化もたせマンツーマンで対応	1	0	0
No. 9	動作や会話を多くし日中寝ないように働きかける	-	0	0
No.10	現状維持	1	1	1
No.11	現状維持	1	1	1
No.12	現在の意欲を維持	1	0	0
No.12 家	家族のホーム入所希望の件話合う	-	-	?
No.13	通所が楽しみとなるようマンツーマンで対応	0	1	?
No.14	現状維持	1	1	0
No.15	現状維持	1	0	0

のケースについてプランニングされた課題を簡単に記した。1回目、もしくは2回目にプランニングした課題が達成されたばあい、また、達成されなかったばあい、つぎの時期に新たな課題が設定されているケースがいくつかある。そのばあいには矢印を書いて新しい課題も記した。だが、多くのケースでは、課題が達成されたばあい、その達成された状況を維持することとか、同じ課題をさらに継続することとしているので、これらについては1回目もしくは2回目の課題しか記載していない。「1回目」の欄は、1回目の課題が達成されたかどうかを判断した結果を示す。「2回目」、「3回目」の欄も同様である。その欄の「0」は課題が達成されなかったことを、「1」は課題が達成したことを表している。「-」は年度途中の利用でその時期利用しておらず、課題が設定されていなかったか、もしくは、利用していたけれども入院や休みが継続達成評価できなかったことを示す。評価できないので非該当とした。また、「…」は、アセスメントではなんらかの問題があると記述されているのに、

もう少し様子を見るといった理由で課題が設定されなかったケースである。

課題が達成された(1)か、達成されていない(0)かの判断は、ISPを記入した2人の職員が記載している課題達成状況の情報をもとに、また、それが不十分なばあいはケース記録の情報で補いながら筆者が判断した。言うまでもなく、この判断は全ケースにあてはまるような統一的な基準にもとづいてはいない。個々のケースについて設定された課題、つまり「現状維持」以外は、主として高齢者の行動になんらかの望ましい変化をもたらすことを目的とした職員の対応課題が、約3ヶ月間のあいだに高齢者の行動の変化という形で達成されたかどうかを判断して「1」か「0」をつけたわけである。初めから職員が判断して「1」か「0」をつけるという方法もある。だが、課題達成状況を文章で表してもらったことによって、ケース記録と照らし合わせながらその職員の達成状況判断の妥当性を筆者たちが確認することができた。

表の「?」は情報が少なく、達成か否かを判定す



表19-2 各ケースの課題と達成状況(2)

課 題		1回目	2回目	3回目
N D G 新				
No.16	Tさんらのグループに入れるように援助	1	1	1
No.17	通所拒否にたいして積極的に対話し参加意欲の向上を	1	1	1
No.18	時間をかけて自発的動作を促していく→歩行動作の改善	1	1	1
No.19	体重の平価と膝の痛みに気を配る	—	—	1
No.20	身体機能維持を目的として対応, とくに転倒防止	—	0	0
No.21	他の人と交流を見守り, 必要時援助	1	1	1
No.22	身体機能低下予防を目的として自発的動作を促す	1	1	1
No.23	妻退院後デイ再利用の時点で対応を検討	—	—	—
No.24	高血圧にたいする注意・見守り	?	1	1
No.25	現状維持	—	—	1
No.26	課題設定なし→安全性確保のために歩行動作指導	…	…	1
No.27	現状維持→座席位置考慮して会話引き出すようにする	0	0	—
No.28	現状維持	1	1	1
No.29	現状維持	—	—	1
No.30	課題設定なし	…	…	…
N D G 継				
No.31	不調の訴えには勇気づけて対応, 活動を促して体力向上を	—	0	0
No.32	弱視のこだわりを軽減するための自身の得られる活動を	1	0	0
No.33	生活のハリをもつよう趣味の作品を鑑賞し創作意欲を→現状維持	1	1	1
No.34	自分でできたときには強化して自立心を高める	0	0	0
No.35	自宅でもできる趣味活動を→退院後の機能低下の予防	?	1	1
No.35 家	家族に疾病に関する知識を理解してもらう	?	?	0
No.36	現状維持	1	1	1
No.37	現状維持	—	1	1
No.37 家	家族へのホーム入所説明と様子観察・見守り	—	?	?
No.38	現状維持	1	1	1
No.39	現状維持	1	1	1
No.40	課題設定なし	…	…	…
No.41	現状維持	1	1	1
No.42	現状維持	1	1	1
No.43	ADL維持のために体重の増加に注意, 見守り	?	?	?
No.44	再発作に注意しながら自立動作を多くしていくよう援助	0	0	0
No.45	趣味を鑑賞し創作意欲を高めて他の人との交流を促進	0	1	1
No.46	会話に入りやすい位置に席を変え話しかけも多くなる	1	1	1
No.47	現状維持	1	1	1
No.48	現状維持	1	1	1
No.49	現状維持	1	1	1
No.50	現状維持	1	0	1

ることができなかつたことを示す。家族についても課題設定したケースが7例あったので、これも表に記載してある。なお、課題そのものの妥当性について評価することは、表1の⑨という研究タイプをおこなうということである。これにかんしては稿を改めておこないたい。

さて、上記のような方法で判断した課題達成状況

の結果を1回目2回目, 3回目ごとにまとめたのが表20である。実数が少ないが、おおよその傾向をつかむため、利用者本人についてのみ比率を求めた(この計算の母数は課題設定なしと非該当を除いた数)。

まず、1回目, 課題を達成したケースは全体では73%, DGとNDGではあまり違いがない。つぎに

表20 課題達成状況

			計	課題達成 (1)	未達成 (0)	評価不能 (?)	課題設定 なし(...)	非該当 (-)	
1 回 目	D	新	本人	4	2	1		1	
			家族	2		1		1	
	G	継	本人	11	7	2		1	
			家族	3	1		1	1	
	G	小計	本人 (%)	15 (N=12)	9 (75.0)	3 (25.0)		1	2
			本人	15	6	1	1	2	5
	D	継	本人	20	12	3	2	1	2
			家族	2			1		1
	G	小計	本人 (%)	35 (N=25)	18 (72.0)	4 (16.0)	3 (12.0)	3	7
			全 体	50 (N=37)	27 (73.0)	7 (19.0)	3 (8.1)	4	9
2 回 目	D	新	本人	4	2	2			
			家族	2	1		1		
	G	継	本人	11	4	6		1	
			家族	3	1		1	1	
	G	小計	本人 (%)	15 (N=14)	6 (42.9)	8 (57.1)		1	
			本人	15	7	2		2	4
	D	継	本人	20	13	5	1	1	
			家族	2					2
	G	小計	本人 (%)	35 (N=28)	20 (71.4)	7 (25.0)	1 (3.6)	3	4
			全 体	50 (N=42)	26 (61.9)	15 (35.7)	1 (2.4)	4	4
3 回 目	D	新	本人	4	2	1	1		
			家族	2		1	1		
	G	継	本人	11	2	7	1	1	
			家族	3	1		2		
	G	小計	本人 (%)	15 (N=14)	4 (28.6)	8 (57.1)	2 (14.3)	1	
			本人	15	11	1		1	2
	D	継	本人	20	14	4	1	1	
			家族	2		1	1		
	G	小計	本人 (%)	35 (N=31)	25 (80.6)	5 (16.1)	1 (3.2)	2	2
			全 体	50 (N=45)	29 (64.4)	13 (28.9)	3 (6.7)	3	2

2回目。全体では達成ケースの比率が62%と1回目にくらべやや落ちている。NDGは1回目と殆ど違いがないが、DGが43%まで落ちている。なかでもとくに継続利用グループに達成ケースが少な

くなっている。3回目になると、全体では64%と2回目とあまり変わりがない。NDGを2回目と比べると81%とやや増加傾向がみられる。これにたいしてDGでは2回目よりさらに下がり、29%と

なっている。DGのなかでも継続利用グループで達成ケースが減少している。

要するに、非痴呆性老人であるNDGは1回目、2回目、3回目ともに課題達成ケースが7割から8割あるのにたいし、非痴呆性老人のDGでは1回目の7割から4割、3割と達成ケースが減少している。DGのなかでも継続利用グループの達成ケース減少割合が目立つという結果となった。痴呆性老人のばあいは、相対的に課題が達成しにくいという結果になったわけだが、後述するようにその一因は痴呆症状の進行ということがある。

つぎに、課題の達成プロセスはどのようなものであったのか、また、プロセスのタイプと課題の内容はどのような関係にあるのかなどを見ていく。

各課題は個別的に設定されているが、これらは大きく10個にまとめることができる。表21はこのまとめた課題ごとに、それぞれのケースの課題達成状況プロセスのタイプを整理してみたものである。このプロセスのタイプはつぎの5つである。「連続課題達成ケース（1, 2, 3回目ともに、もしくは2, 3回目がともに課題を達成しているケース）」、「最終課題達成ケース（3回目にはじめて課題を達成したケース）」、「中途未達成ケース（1, 2回目ともに、もしくは1回目か2回目に課題を達成したあとの課題が未達成となったケース）」、「連続課題未達成ケース（1, 2, 3回目ともに、もしくは2, 3回目ともに課題を達成することができなかったケース）」、「その他」。なお、この表に示した課題

表21 課題達成過程のタイプ

	連続達成ケース (1, 2, 3回もしくは 2, 3回達成)				最終達成ケース (3回目に達成)				中途未達成ケース (1,2回もしくは1又は 2回目達成後未達成)				連続未達成ケース (1, 2, 3回もしくは 2, 3回とも未達成)				その他				
	D		G		NDG		NDG		D		G		NDG		D		G		NDG		
	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	新	継	
a 健康管理			No.24																	No.19	No.43
b 心身機能の維持・改善			No.22 No.18	No.35										No.9	No.20	No.44				No.26	
c 他者との交流の促進			No.16 No.21	No.45 No.46	No.1											No.27					
d 生活のハリ・活動意欲の促進			No.17	No.33					No.8					No.6							
e 現在の心身機能・活動意欲・他者との交流維持（現状維持）	No.3	No.10 No.11	No.28	No.36 No.37 No.38 No.39 No.41 No.42 No.47 No.48 No.49					No.2 No.4	No.12 No.14 No.15		No.50								No.25 No.29	
f 自立心の向上											No.32					No.31 No.34					
g 家族関係の調整										No.5											
h 家族の疾病理解促進のためのコミュニケーション									No.2 家												No.35 家
i 家族の不安軽減のためのコミュニケーション		No.7 家																			
j その他（課題設定なしを含む）																	No.4 家	No.12 家 No.13	No.23 No.30	No.37 家 No.40	

内容は1回目の課題である。

全体の数からいえば、連続課題達成ケースが一番多く、そのつぎが中途未達成ケースである。連続課題達成ケースはNDGに、とくにNDGの継続利用グループのe現在の心身機能・活動意欲・他者との交流状況の維持（現状維持）を課題としたケースに多い。これらのケースは1年以上デイ・ホームを利用しており、心身機能や心理状態が比較的安定しているケースである。

これにたいし、同じ課題が設定されたDGの継続利用グループでは、連続課題達成ケースよりも中途未達成ケースが多い。この中途未達成ケースは当初安定していた状態が、痴呆症状の進行によって徐々に好ましくない行動や態度の生じる状態に変化していった例である。たとえばNo.12は初めのアセスメントで見当識障害が目立つが話かけると多弁になる女性（68歳）で活動にも参加できていると査定された。そこで、現状の活動状況、交流意欲を維持していくことを課題として対応した。約3ヶ月後の1回目の課題達成状況評価では、活動熱心で楽しんでいると評価できたので、この現状をさらに維持していくことを2回目の課題とした。だが、その後、頭が痛いとか目が見えにくいと言った訴えが生じ、センターのショートステイ利用中には転倒もあった。帰宅後、精神面の混乱状況が起き、デイ・ホーム活動中にも「娘に叱られたから死のうとしたが死ねなかった」と話す場面が見られた。その後、自宅でも転倒し、家族から老人ホーム入所申請が出されるようになった。そしてデイで活動しているときには「あっちこっち痛くて早く死にたい」と言うことがあり、笑顔がなく元気がない日が続いた。以上のように、現状維持という課題が利用半ば頃から達成できなくなった。

連続課題達成ケースには、課題e現状維持の他に、a健康管理やb心理機能の維持・改善、他者との交流の促進、d生活のハリ・活動意欲の促進といった課題がたてられたNDGのケースがe現状維持のケースと同じ数の10ケースある。これらのケースは、職員によるより積極的、意識的な介入（注意、指示、介助、指導、対話、導入、活動の奨励・動機づけ、勇気づけなど）によってそれぞれの課題が

達成されている。eの現状維持という課題にたいしても随時こうした援助をおこなっているが、a、b、c、dといった課題のケースにはこうした援助をより意図的におこなったわけである。NDGのこうしたケースは新規利用グループに相対的に多い。

その一例、No.18は右片麻痺と言語障害がある女性（76歳）で、その障害をもつところから来ていると思われる甘えが見られ、自分から作業に取り組むという活動意欲が低い、というのが初めのアセスメント記述であった。そこで、自立心向上と機能維持を目的として、時間をかけて自発的動作を促していくことを課題としている。1回目の課題達成状況評価時までには、趣味活動では自分のできる作業は自分なりに努力しておこなったり、体操時に声をだして、皆と数を数えるなど参加意欲と自立心の向上が見られるようになった。そこで、2回目の課題はさらに自発的動作を促すこととし、途中で足の運びが悪くなったので、3回目の課題は歩行動作を正確におこなうよう指導することとした。利用終了時までには歩行動作も正確にできるようになり、3回目の課題達成評価では、当初より自尊心や意欲も向上したと判断された。

つぎに見る最終課題達成ケースはDGの2ケースのみであった。そのうちのNo.1は活動意欲は普通であるが、他の利用者との交流が乏しいとアセスメントされた女性（84歳）で、他の利用者との交流を促進することが課題となった。職員の援助を得て趣味活動には意欲を見せるが、他の利用者との会話がほとんどない状況がずっと続いた。この間2回目、3回目の課題は1回目のそれを継続している。最後の時期になってから、昼休み特定の他の利用者とは会話するようになり、会話を楽しんでいる様子がうかがえるようになった。つまり、3回目の課題設定以降になってやっと課題が達成した。

最後の連続課題未達成ケースは課題がb、c、d、fといったケースでNDGに多い。たとえば、No.34の74歳の女性は、自分を見てもらいたい、手伝ってもらいたい、麻痺側の運動もできるだけ人にやってもらいたいというように職員にたいする依存心が強かった。また、特定の利用者にたいしても依頼心が強く、他の人と交流しようとしな

う問題をもっていた。そこで、自立心を高めることを目的とし、活動でも自分でできるところはとくに援助せず、自分でできたばあいには職員がことばでそれを強化していくことを課題とした。だが、その後も特定の人とだけ話すとか、職員に頼りがちな傾向が続く。職員間の意思統一を再度図り1回目と同じ課題で対応していくが、今度はボランティアに頼る面が多く出るようになってしまう。そして、最後の期間には欠席が多く、当初目的とした変化はこの年度の利用終了時まで見られなかった。

なお、その他のケースは、非該当や評価不明の時期があったケース、年度途中の利用で課題設定と達成評価が1回しかできなかったケースなどである。

ここまでは高齢者本人についてみてきたが、最後に家族にかんして触れておく。家族にかんしては、No.7の家族の不安軽減のため家族とのコミュニケーションをふやすという課題が、情報提供や家族の気持ちを聞くという対応によって家族の不安を軽減することができたという唯一の課題達成ケースである。No.2の家族、No.35の家族にたいする課題は、高齢者にたいする対応方法を変えてもらうために、高齢者の疾病（痴呆症とパーキンソン病）とその対応にかんする理解を促進することであったが、これらは必ずしも達成できていない。その他の家族の課題は、課題そのものが特定の行動の変化を目的とするものではなくややあいまいであったため、評価そのものができなかった。

全体に、家族にたいして課題を設定したケースが少なかったこと、また、課題が具体的でなかったことは、つぎの理由によるところが大きい。デイ・ホーム利用前の事前家庭訪問時の調査担当ワーカー（生活指導員）が、年度途中事故により入院したり、法人の都合によってデイの現場から離れざるを得なかった。もちろん記録や口頭による引き継ぎはおこなわれているものの、家庭訪問調査をとおして得られる家族のもっている雰囲気や信頼関係形成の素地を、引継いだワーカーが十分にもてななかった。送迎時に接触できる家族は自分の送迎エリアの家族に限られ、他のエリアの家族で気にかか

っている家族がいたとしても、時間の制約もあってなかなか接触が困難であった。また、引き継いだワーカー以外の職員も新しいメンバーが多く、主として高齢者の理解と対応に努力が払われる傾向があった（同じ理由から1回目のアセスメントも3ヶ月以上経ってからおこなうことになった）。

間接的サービス利用者である家族にたいする職員の対応課題の設定や対応方法の検討は別稿で扱いたい。

#### 4 まとめ

Iケアセンターの職員がサービス提供の意義を確認するとともに、サービスの質を上げていくための基礎的データを得ること、また、センターが位置するF市のデイ・サービス事業の量的拡充と質の充実化にはずみをつけるためのデータ公表を目的として、当センターが実施しているデイ・ホーム事業のプログラム評価と個別援助実践評価をおこなった。

プログラム評価では、高齢者調査と家族調査をおこなった。これらの調査によって、ほぼ全員の高齢者が本プログラムに満足感を感じていること、とくに非痴呆性老人がより強く感じているらしいことがわかった。また、家族介護者は本プログラムにたいし複数の意義を認識しているが、とくに精神的な支えとしての意義が強く認識されていること、とくに痴呆性老人を抱える家族にそれがより強いことが確認された。当センターが本サービスの第一の提供目的としている、高齢者に喜びと満足感をもってもらふことと、家族に精神的支援をおこなうこととはほぼ達成されているといつてよい。副次的なねらいとしていた高齢者と介護者の日常生活での望ましい変化という点については、心理的側面と生活態度に望ましい変化があったという高齢者が全体の4分の1から3分の1ほどいた。とくにこれは非痴呆性老人の新規利用者により多かった。介護者ではその3分の1から2分の1において、時間的余裕、精神的余裕が生じた・増したという回答が見られた。とくに痴呆性老人をかかえる家族により多かった。

個別援助実践評価にかんじていえば、非痴呆性老人のばあい、1回目、2回目、3回目を通してその課題が7割から8割のケースで達成されていたが、痴呆性老人のばあい7割から4割、3割と課題達成ケースが減少していた。これは老人の痴呆様症状が進行したためと考えられる。1, 2, 3回とも課題が達成していた連続課題達成ケースは非痴呆性老人に多かった。その課題内容は「現状維持」のケースと、それ以外の特定変化をもたらす課題（他者との交流の促進、生活のハリ・活動意欲の促進、心身機能の改善など）のケースが半々であった。中途未達成ケースは痴呆性老人が多かった。

これらの結果から、職員は当センターの本サービスの提供目的がおおよそ達成されていることを確認し、その意義を改めて自覚した。と同時に、個別援助実践、つまり個々のとケースごとに対応目標と課題を設定して対応していくことにかんじて、反省点を確認した。課題設定のありかた、課題と対応方法にかんする職員の一一致した理解の促進、それぞれの時期の課題評価の方法など。今後はこれらの点について検討を重ねていきたい。

そして、他のデイ・サービス提供施設においてもプログラム評価や個別援助実践評価の方法が検討され、実施されることを期待したい。評価研究の方法と結果データが公表され、実践者相互に実践のありかたを検討していくことができればよいと考えている。（個別援助実践評価の事例検討としては拙稿「デイ・サービスセンターにおけるソーシャルワーク」都立大学紀要人文学報233号を参照願いたい。）

#### 注

- 1) Bの実践評価をプログラム評価と個別援助実践評価に分ける考え方は、次の文献による。Tony Tripodi, *Evaluative Reserch For Social Workers*, Prentice - Hall Inc., 1983

- 2) Challisらのタームでいえば、前者はターゲットの水平的効率性（horizontal target efficiency）、後者はターゲットの垂直的効率性（vertical target efficiency）ということになる。David Challis and Blendyn Davies, *Case Management in Community Care ; An evaluated experiment in the home care of the elderly*, Gower Publishing Co., 1986, P. 13

- 3) 副田は以前、デイ・サービスが対象としている人々のうち、どのていどの割合の人々が利用することができているのか、充足率として全国レベルと都レベルで計算してみたことがある。副田あけみ、「老人のためのデイ・サービス」総合都市研究 第32号 1987

- 4) ここでは「あまりズレなし」が多かったことを確認したが、ズレありがなぜかその点を検討することも家族や高齢者への個別的対応を考えていくために必要である。

- 5) 個別サービス・プランニング票（Individual Service Planning=ISP）という名称は、GoldbergらのCase Review Formや、Renshawの言うindividual program planning (IPP) を参考にした。E. Matila Goldberg and R. William Warburton, *Ends and Means in Social Work : The development and outcome of a case review system for social workers*, George Allen Unwin, 1979, Judy Renshaw, *Care in the Community : Individual Care Planning and Case Management*, Br.J. of Social Work, 1987, 18

- 6) Goldbergらはケース・レビュー・フォームを用いたソーシャルワーク実践の評価にかんじて、その評価プロセス自体と結果の検討会がソーシャルワーカーにとって教育的意味をもつことを強調している。

#### Key Words (キー・ワード)

Day Service (デイ・サービス), Evaluative Research (評価研究), Program Evaluation (プログラム評価), Individual Pracice Evaluation (個別援助実践評価), ISP = Individual Service Planning (個別サービス・プランニング票)

PROGRAM EVALUATIVE RESEARCH AND INDIVIDUAL PRACTICE  
EVALUATIVE RESEARCH OF DAY – CARE FOR THE ELDERLY

Akemi Soeda\*, Makoto Saito\*\*

\*Tokyo Metropolitan University

\*\*Izumien Care Center

*Comprehensive Urban Studies*, No. 45, 1992, pp. 29~51

Abstract

Evaluative research on personal services is classified into ten types according to object and standard of evaluation. From among those ten types we selected two, program evaluation and individual practice evaluation, in view of their effectiveness at a day – care center for the elderly.

Program evaluative research of day – care service turned out of satisfy most of the elderly, especially, the non – domentina, and most family caregivers, those who take care of the dementia in paticular, saw it as meaningful. After being in the program for one year, about a third of the elderly showed improvement in their mental condition and their attitude toward normal life, and half of their caregivers experienced a reduction in stress and enjoyed more personal time than before.

Individual practice evaluative research revealed that the practices for non – dementia were achieving most of their goals in all three phases, although only one third of those for dementia succeeded in the third phase.